

島津家の戦争(2)

米窪明美

集英社インターナショナル ウェブ立ち読み

第三章 京の守護者

嘉永六年（一八五三）、浦賀沖に四隻の軍艦を率いて現われたペリーは、アメリカ大統領の国書を携え幕府に開国を迫った。これに対して、終始、無為無策であった幕府の在り方に危機感を覚えた各地の中・下級武士たちの間で、政治運動の連帯が急速に広がってゆく。

彼らは「志士」と呼ばれていた。

志士とは、論語の一節（志士仁人は生を求めて以て仁を害すること無し。身を殺して以て仁を成すこと有り）（『論語』衛霊公篇）に由来する。己の身を殺しても、天下国家のために正しきことを成し遂げる、彼らの主張は瞬く間に全国各地に飛び火していった。

薩摩藩で志士運動の中枢となったのは、名君と称されながら志半ばで亡くなった藩主・斉彬に見出され、その遺志を引き継ぐ若手下級武士の集団・精忠組だった。

西郷隆盛、大久保利通、有村俊斎（海江田信義）、吉井友実、伊地知正治、税所篤、有馬新七、奈良原繁、村田新八、野津鎮雄、野津道貫、大山綱良、西郷従道など、後に近代日本の要職を担

う人々の名前が綺羅、星のごとく連なっていた。

斉彬の死後、家督を継いだのは斉彬の実弟・久光の長男・忠義であった。後ろ盾を失った若者たちは藩政の行く末に希望を失い、集団で脱藩し京都に攻めのぼり、幕府寄りの公家や京都所司代を暗殺する計画を練った。

事前にそのことを知った藩主・忠義は、彼らを押しとどめる直筆の書状を送る。その書面で忠義が彼らのことを「精忠士」と称えたことが、精忠組の名前の由来とされている（誠忠組といわれる場合もある）。

彼らを称えることで無謀な計画を中止させ、結果的には自分の味方にまでつけてしまおうという、老練な政治手法は若い忠義の判断ではない。実父であり後見人でもあった、「国主」島津久光の助言があつたことは容易に想像がつく。

ところで、幕末を描いたテレビドラマにはかならずといってよいほど、若き日の西郷隆盛や大久保利通など精忠組の若者たちが、いかにも身なりに構わない様子で登場する。だが、史実はむしろ逆。

「ご一新」のあと、幕末維新を経験した人たちの貴重な談話を集めた資料に、薩摩藩の精忠組の若者たちに関して、次のような一節がある。

（その人々の容貌は、従来の鹿兒島風を脱しておりました、私どもも微かに記憶していますが、衣服もちよっと立派で、頭髮は昔時の詰め鬢ではなく、わずか指一本入るくらいこれを高くし、

朱鞘しゆびやく白柄銀鞘しろがらぎんさく尻しりで、我こそは誠忠派でござるといふ風に街頭かっほを闊歩するさまは、なかなかの威勢でありました。〔維新史料編纂会講演速記録二〕

目立つ髪形の理由を質されると、澄まして「鬢を大きくしなくては、他国に出て不都合だ」

〔史談会速記録〕第十九輯）などと、うそぶいてもいたらしい。

彼らの姿が「都会的」であるといつても、それはあくまでも鹿児島の人々から見てのことであつて、江戸の人々からすれば別の見解もあるかもしれない。だが意外にも、時代劇や小説が作り上げた印象とは裏腹に、彼らがお洒落しやせつに関心のある若者であつたことは間違いない。

また精忠組には、江戸へ遊学や勤務経験のある者たちが多く参加していた。彼らは江戸言葉を操ることができた。このことは志士運動のうえでも重要だつた。

江戸時代、ごく普通の武士が他藩の武士と書面で意思疎通を図るのは至極簡単なことであつた。ところが会話となると途端にむずかしくなる。それぞれのお国言葉がきつくと、相手の言葉が理解できないのだ。言葉はよそ者を見抜く戦略的な手段、各地域では固有の方言が大切に守られていた。その中でも、薩摩藩は一種の「言語鎖国」をしていたと評されるほどで、薩摩弁の難解さは外国語同然だつたという。

そうした状況の中、江戸に出た経験のある若手の武士たちは江戸の言葉と話せるというだけで、下級武士とはいえ各地域の「国際派」の人々であつたのだ。

さて、この精忠組の分派が都城にもあつた。

都城島津家の家臣で、後に宮崎県選出の衆議院議員となる肥田景之は、政治運動に邁進する父親の活躍ぶりを子どもながらに鮮明に覚えている。

〈当時京師には、諸国の浪士や有志の人々相集つて、勤王の説を主張する時でありますから、我が地方においても尊王説を唱へ士気を鼓舞いたしまして、是非勤王の士が闕下に馳せ上りて十分尽力を致すやうにしなければならぬといふやうなことを主張しておりました〉〔『史談会速記録』第 二百一十六輯〕

まだ幼さの残る年頃の肥田の兄は、精忠組の幹部に可愛がってもらつていた。

〔安政三年に私の兄肥田景直と申す者が、生年まだ十四歳の時であります。これが、遊学に江戸に出まして、当時在府の西郷隆盛、海江田信義、有馬新七、有村勇助次左衛門、伊地知貞馨などといふ様な方々の指導を受けまして〕〔同上〕

西郷隆盛は、水戸藩の儒者で藩主の政治顧問でもあつた藤田東湖と面会する際にも、景直少年を伴つていたという。魅力ある人々と出会い、すっかり彼らに感化された彼は、地元に戻ると少年たちを集め、精忠組の子備軍を組織した。かくして都城の志士運動は、ますます強化されていった。

ところで、精忠組の西郷隆盛や大久保利通は、下級武士とはいへ直接藩主に仕える城下士である。一方、都城精忠組の面々は私領の領主に仕える家中士であつた。

元来両者の間には差がなかったが、時代が下るにつれて、城下士は郷土や家中士を見下すようになつていった。それゆへ都城精忠組のように、城下士と対等に付き合う例は珍しかった。しか

し、都城は薩摩藩の中でも特殊な地位を占めていたため、彼らは城下士に対しても臆することなく自由に振る舞っていた。

すでに述べたことの繰り返しになるが、都城は藩内最大の私領である。この地は都城島津家が宗家から運営を委託されていた土地であったが、都城島津家家臣団には、この土地を藩主・島津宗家から委託されたという意識はさらさらなかった。

そもそも都城は、初代当主・資忠が戦功により足利義詮あしかがよしあきから分け与えられたものであり、島津宗家から与えられたものではない——それが彼らにとつての都城なのである。彼にとつて大事なのは「都城は先祖代々、自分たちが住み、耕してきた土地なのだ」ということだった。

都城は住民のほぼ半数が武士という、武士の王国である。

鹿児島から距離がある、薩摩藩の米倉と呼ばれるほどの土地であったことも、自立した雰囲気醸成した一因だろう。人々の心の中に「本藩なにするものぞ」という気概が溢れていたのは当然すぎるほど当然であった。そもそも薩摩藩自体が日本の中で特異な存在なのに、そんな薩摩藩のなかでも特異なのだから、都城がどれほど個性の強い、いや強すぎる土地柄なのか分かるだろう。

ここで少し幕末の都城島津家家臣団の生活ぶりをのぞいてみよう。

幕府の一国一城の令により都城の城は廃城となり、代わりに領主館を現在の都城市役所周辺に建設した。その周囲には家臣団の上級武士の住居区と、明からの移民の住む唐人町などの町場が

整備された。

島津一族は鹿児島城下の屋敷に妻子を住ませ、所領との間を往き来した。都城の上級武士も当主に従い、鹿児島と都城の間を往復する生活を送っていた。

薩摩藩の武士の給与は、給地とよばれる知行地を与えられ、各自が年貢を取り立てる仕組みになっていた。その他に薩摩では、武士がみずから農業を行なうことも、土地を開墾することも認められている。

したがって、豊饒な土地に暮らす都城の下級武士たちは、表高おもたかよりも自作の農地から得られる収入のほうが多い場合もあった。また、都城の上級武士たちは自分で耕作はしないものの、やはり表高以外に、大きな副収入を得ていた。

このような土地柄なので、おのずから武士と農民とを隔てる垣根は低い。いちおう村では道路を挟んで武士階級と農民の居住区が分かれており、祭礼の際などの棧敷も武士用と農民用とに分かれ、村の経営は武士の指導のもとに進められたが、だからといって両者が厳しく対立していたわけではなく協力しながら生活していた。

こうした農民と武士との共同生活を見守っていたのが、村のあちこちに置かれた「タノカンサア（田の神様）」と呼ばれる、高さ五十センチから一メートルほどの丸彫り・浮き彫りの石像であった。「神様」といっても社の中に安置されているのではなく、たいていは露台である。

立ったり踊ったりさまざまな形のものがある、素朴な神様は今でも旧薩摩領内のそこかしこに点在している。都城でも尋ねると、「あすきおいやつど（あそこにいらいっしやるよ）」と教えてもら

える。

このような生活の中で都城精忠組は、鹿兒島精忠組と連携しながら運動の幅を広げていった。鹿兒島城下にもまして、都城は無骨で愚直な武士像を尊ぶ土地柄である。彼らの行動は、さまざまな意味で評判を呼ぶ。たとえば、都会的な髪型や振る舞い方もその一つだ。年配者が彼ら自身なりに眉をひそめていたことは想像に難くない。

保守層の渋い表情にもかかわらず、彼らがのびのびと活動できた裏には、都城島津家当主・久静ひさずかの存在があった。精忠組の動きを押しとどめようとした藩主・忠義とは逆に、久静は志士運動を側面から応援していた。

久静は前当主・久本ひさもとの長男で、室は島津久光の次女・於治おはる、つまり久静は久光の婿殿ということになる。当時久光は息子の後見役として藩政に力をふるう、いわば薩摩藩の事実上の支配者であった。その久光が政治上の相談相手として、最も信頼を置いていたのが婿の久静だった。

久静は思慮深く、物事の本質を見抜く目を持っていた。彼には現実の出来事の奥に、遙か未来の可能性を見出す力があった。このような才能もさることながら、何より人を惹きつけたのは、彼に生まれつき備わった華やかさだ。

久静が入ってくるだけで、部屋じゅうが明るくなった。人は彼に自然と心を開き、その周囲には陽気な笑い声が絶えなかった。これに対して久光は、宴会好きが多い薩摩武士にしては珍しく自室で一人静かにむずかしい本さえ読んでいれば幸せという内向的な人物、自身と異なる性質の

婿が可愛くまた誰より頼りにしていた。

藩内での久静の影響力は大きく、その庇護のもと都城精忠組は日本各地を思う存分駆け回ることができた。やがて時代は主従に思いがけない舞台を用意してくれる。それは幕末の動乱に揺れる、京都の御所警備という大任であった。

文久二（一八六二）年五月四日、鹿兒島前の浜に蒸気船・天祐丸があたりを払う威容を見せていた。

天祐丸は薩摩藩が長崎で購入したイギリス船で、価格は十二万八千ドル、翌年に勃発した薩英戦争でイギリス側の放火により焼失する運命にある三隻のうちの一つである。艦上には船印として日の丸と、白地に紺色で島津宗家の家紋・丸十字が染め抜かれた旗が掲げられていた。

出発の時刻になり、港に姿を現わした当主・久静と三百名余の都城島津家臣団は、足早に船内へ吸い込まれてゆく。一行はこれから長崎―平戸―博多などを経て大坂へ上陸し、伏見から京都へと向かうのだ。

在京中の久光から都城の島津家へ率兵^{もつて}上京要請が届いたのは、ほんの十日ほど前のこと。

あいにく当主・久静は体調を崩し、霧島温泉にて療養中の身の上だった。立場が立場ゆえ、日頃の疲労が蓄積したためと推測される。しかし、早飛脚^{はやびやく}で知らせを受けるや否や、彼は温泉を抜け出し鹿兒島へと急ぐ。鹿兒島には家老・北郷資雄以下三百余りの精鋭部隊が、彼の到着を待ち構えていた。

彼らが京都で遂行するべき任務は、御所の警備と町の治安維持だという。これほど重要な仕事を自分が任されることになろうとは、さすがの久静も想像すらしなかった。ましてや家臣たちは舞い上がり、一種の興奮状態になっていた。

それにしても、なぜ突然、薩摩藩の私領の当主とその家臣が、帝のおそば近くに仕えるような、大それた任務を担当することになったのだろうか。話は二ヶ月前に遡る。

同年三月十六日、久光は一千余の兵を率いて上洛した。

混乱する世情を憂えた久光は、まず上京し勅諭を得て、その後江戸へ向かい幕政改革を促す決心をする。彼のいう「改革」とは、安政の大獄により肅清された兄・斉彬の盟友たち、開明派の大名の復権であった。

とはいえ無位無官の久光には東上する資格がない。そこでわざと江戸屋敷に火を放った。薩摩武士の行動にはためらいがない。この火事を理由に、薩摩藩は幕府へ参勤交代の延期を願い出た。目論見どおり許可が下りると、新しい屋敷の造営監督と参勤交代延期のお礼という名目で久光は出国を果たした。

このように東上計画は出だしからして相当に無謀なものであったが、めでたく進発と決まっても久光の前には難問が山積していた。

久光は宗家に生まれたが、次男ゆえにこの時まで一度も薩摩藩を出たことがなかった。すなわち、雄藩の大名にも有力公家にも親しい友人がいるわけではない。

しかも言葉の問題がある。大名は世子せいし（跡継ぎ）時代を江戸屋敷で過ごすから、大名同士の会話は当然のことながら江戸言葉になる。江戸育ちの斉彬とは違い、久光にはこの江戸言葉もおぼつかない。

また、江戸城を中心とした上流階級では、洗練された立ち居振る舞いも要求されるのだが、その点でも久光は心もとない。しかるに久光は上洛して宮廷社会とも交渉したいとさえ考えているのだ。言葉遣いや作法に関して、武士以上に厳しい公家たちが冷ややかな視線や忍び笑いを久光にあびせかけるのは目に見えていた。

そこで藩内には久光の計画を危ぶむ声もあった。ことに西郷隆盛が反対した話は有名だ。

西郷は先代藩主・斉彬の命を受けて、諸大名家や公家などと交渉経験を持っていたから、率直に自分の経験から意見を述べたのだが、あまりにも忌憚きたんがなすぎた。西郷が言い放った一言を、久光は後々まで忘れることはなかったという。

「あなた様はお兄様と違ってまったくの『地五郎ジゴロ』なのだから、にわかに上京しても天下の名士たちと渡りあえるわけもござりませうまい」

「地五郎」とは、薩摩地方の方言で田舎者いながという意味である。藩主の父に対して、西郷は遠慮するところがなかった。

だが、結論から言えば、西郷の予想は外れた。

当時の京都は、尊王攘夷論を唱える浪人たちが全国から集まり、不穏な空気に包まれていた。

久光東上の報は浪人たちに希望を与えた。関ヶ原における薩摩武士の勇猛果敢な戦いぶりを知らない者はない。「眠れる獅子がついに目覚めたか」と、浪人たちは色めきたった。

しかし、上洛した久光は浪人の期待を裏切った。彼は寺田屋に集結していた急進派の薩摩藩士を鎮圧し、たちまち京都の治安を安定させたのである。

また宮廷への働きかけにおいても、久光は成果を上げた。

当時の天皇は孝明天皇。残された記録から浮かび上がる孝明天皇は、感情に起伏があり好嫌の激しい人物である。それに比べて皇子の明治天皇は、はっきりと感情を表わさない、控えめなキヤラクター。親子の性格の違いは鮮やかだ。

もしかしたら、明治天皇は父親の生き方から何か学ぶものがあって、表情や声色に自分の意志がにじむのを抑えていたのかもしれない。

それはさておき、久光の計画が成功するか否かは、孝明天皇が久光をどう評価するかにかかっていた。

天は久光に味方する。

二人は人間としての本質、周囲に流されることなく、あくまでも自分の意志を貫き通す点がとてもよく似ていた。首尾よく勅諭を得た久光は、勅使・大原重徳しげとくに従い江戸へ向かい、幕府に改革を迫る運びとなった。その際、久光の代わりに京都の治安維持を誰かに任せる必要があった。

久光の頭に真っ先に浮かんだのは、都城島津家当主である婿殿・久静の顔だった。

久光は今、一世一代の大舞台の上にあった。自藩の下級武士・西郷隆盛にさえ、「地五郎」呼ば

わりされた彼が、あと一步で名君の誉れが高い兄・斉彬の遺志を実現することができるのだ。絶対に失敗は許されない。久光が京の治安を安心して委ねられるのは、久静以外にはいなかった。

久静は久光の気持ちを十二分に理解し、病をおして天祐丸に乗り込んだ。

自分をここまで信頼してくれる義父・久光の期待に応えたいという気持ちがあったのも確かだ。だが、それ以上に彼を突き動かしていたのは、自分の実力がどれほどのものなのか、広い舞台で試してみたいという若者らしい野心だった。

ふと気がつくと、天祐丸が黒い煙を吐きながら波の上を滑りだした。振り返るとみるみる鹿兒島が遠ざかり、やがて海上の点となり視界から消えた。

五月十三日、天祐丸は大坂へ到着した。

土佐堀の旧南部屋敷に入った久静は、京都の久光一行との間で連絡を取り合い、今後の方針を話し合うことになった。

またこれとは別に、久静は都城精忠組を関西方面に派遣していたので、彼らからの報告も受けていた。彼らは城下土の名義を借りて、以前からこの地域で情報収集を行っていたのだ。彼らは沸騰寸前の京都の生々しい様子を語った。都は一筋縄ではいかない場所のようだ。

五月二十日、久静一行は京都に入った。

京雀の間では、久静に関するさまざまなうわさ話がささやかれ、人々の関心は最高潮に達する。一行の行列を眺めるため、沿道にはおびただしい数の見物人が押し掛けていた。久静は薩摩藩

の中でこそ有名だが、全国的な知名度はない。恐らく事前に都城精忠組あたりが、大げさなうわさをあちらこちらで振りまいていたのだろう。人々は固唾かたすをのんで主役の登場を待った。

やがて衆人注視の中、ひとときわ立派な馬に乗り颯爽と久静が登場した。

彼のまもっていた陣羽織ばりは身ごろが鮮やかな緋色の羅紗らしゃ、襟えりの部分は黒の天鵞絨製ビロイダ、首元を二重のフリルが飾っている。旧暦の五月半ばは新暦では六月半ばから七月初旬、京都の蒸し暑さが一番応える時期だ。久静は陣羽織の裏地を薄いブルーの生地で作っていた。沿道の人々が見上げると、馬上の久静の緋色の陣羽織の裾から、南国の海のように鮮やかな青色がこぼれる演出だった。異国情緒たつぷりの豪華な衣装に人々の視線は釘付けになった。

久静がこの衣装をいつ詵うたえたのかは分からないが、急に注文して間に合う品物ではないので、一大事に備えて前から整えておいたものだろう。豪華な衣装から久静の意気込みが伝わる。一陣の涼やかな風が通り抜けるような姿に、人々はしきりと歓声を上げた。

薩摩藩広しといえど、手紙一通で三百余の家臣を引き連れ京都まで馳せ参じるような財力、武力を兼ね備えている者は都城島津家当主・久静以外にはない。さぞや宮廷も歓迎してくれるかと思いきや、返ってきたのは冷たい反応だった。

公家社会から見ればそもそも久光でさえ新参者、ましてその婿殿などというまことに得体の知れない者に、御所を警護する重い役目を易々と与えてもよいものだろうか。彼らの目には不安の色が浮かんでいた。

さらに心配なのは都城隊の実力のほどだ。久光は千余りの兵力を用いて京都を抑えた。それに

引き替え都城隊は僅か三百名、三分の一にも満たない。そのうえ公家たちは、同じ薩摩藩士とはいえ、城下士と都城隊とはやや性質の異なる軍隊であることを見抜いていた。都城は鹿児島とは言葉が微妙に異なり、身なりも一段と野暮つたい。

都城の武士たちは薩摩藩内の他の諸郷の武士たちと同じく、表高の他に身分に応じて自作の農地を所有し、下級武士は自ら田畑に出て汗を流した。農作業により日焼けした彼らの肌は農民そのもの、齒と手の指の股だけがやけに白い。公家たちからすれば、とても藩内一の精鋭部隊とは思えなかった。

島津宗家の親戚筋にあたる近衛忠房このえただふさは久光に対して、小松帯刀たてわきや大久保利通など京都の事情に明るい、若手城下士のリーダーたちのうちの誰か一人を置いてゆくように、と懇願している。

岩倉具視も、久静が警護に当たるならば増兵しなければ心もとない、と伝えてきた。孝明天皇の側近中の側近である岩倉の意見は聖慮に等しい。そのことを知った久静は色をなして怒った。

「薩摩藩第一の大神、島津岩見が京にあって事にあたるかぎり、叡慮えいりょを悩まし奉ることは断じてありませぬ！」

自信に満ちた言葉からは、それとは裏腹に大役を前にしてともしれば不安に陥りそうになる自分を、懸命に鼓舞する痛々しい久静の姿が透けて見える。生命力に溢れる開放的な都城盆地とは異なり、京都盆地は翳かげの統とべる空間、ここでは陽光も善意も志も生まれおちるそばから陰影を帯びる。かつて感じたことのない閉塞感が久静を襲った。

なんとという皮肉なことだろうか、その二日後、つまり久光が江戸へ向かって出発したまさにその日、久静は倒れてしまう。

病名は麻疹、ハシカだった。潜伏期間を考えると、久静が麻疹に罹患したのは旅の途中と推測される。もともと病氣療養中で体力の衰えていた久静は、疲労が重なりひとたまりもなく感染してしまったのだ。

五月二十三日、病に伏した久静を残して都城隊は京都藩邸に入った。京都藩邸は現在の同志社大学今出川キャンパスのあたりにあり、御所まではごく近い。病の身が宮中の清浄さを犯すことを遠慮し、久静は京都藩邸ではなく、伏見御飯屋（旅宿文殊屋四郎宅）において治療に専念することになった。

家老・北郷資雄の指揮のもと、都城隊は禁裏・京都警護の仕事を開始した。

前年鹿児島調練場で行なわれた藩の歩兵練習の総括責任者が久静であったことから、都城島津家では三部隊を組織し、馬回り隊とともに日々の訓練に励んできた。公家社会からは軽く見られていることをつゆほども知らぬ都城隊は、今こそ精進の成果を見せる絶好の機会とばかりに、張り切って任務に邁進した。

一方、伏見御飯屋にはさまざまな医者呼び込まれていた。だが、久静の顔を見るなり皆一様に首を横に振った。うだるような暑さのなか、久静は高熱のために震えていた。

それはあまりにもあつけない幕切れだった。

五月二十六日、都城島津家当主・久静は三十一歳の生涯を閉じた。医者を押しのけて、家臣た

ちは久静の遺骸に取りすがった。ことに久静を唯一の希望の星と仰いできた、都城精忠組は呆然と立ち尽くすしかない。

協議の末、久静の死は隠されることになった。都城隊のうち二百名は何食わぬ顔で禁裏・京都警護の職を全うし、残り百名がひそかに久静の遺体を都城へ連れ帰るといふ段取りだった。

都城隊には、主君の死を悲しんでいる暇はなかった。

まずは帰国組と残留組の名簿が作られた。次いで帰国の日程が慌ただしく組まれた。並行して久静の棺も整えられることになった。悲しみに溺れるのを恐れるように、家臣団はくるくると動き回った。

福山平左衛門はわざわざ大坂へ出向き棺の作製を依頼している。

棺といえば普通は木製であったが、久静の死は伏せられていたので、白木ではいかにも棺桶だと分かって具合が悪い。さりとて家臣としてはそれなりの支度はしたい。また長期間の運搬となるのでしつかりした素材で、しかも相当な大きさが要だ。夏場のことゆえ、遺体の保存についても考えに入れなければならない。

さまざまなることを考慮して、福山は錫製の品を誂えた。ところが、いざでき上がると困った事態が起きた。

「うむむ……、重すぎる」

久静を安置するとなると、移動は不可能。店側はよもや棺として使うなどは、考えていなか

ったのだろう。

「これではいかん。もそつと、軽い品に換えてほしい」

結局、彼が持ち帰ったのはブリキ製の箱だった。

六月二日、帰国組本隊は伏見を出発。旅の名目は北郷藏人が病気になるという触れ込みなので、残留組の家臣たちは殿様の黄泉への旅路を見送ることさえはばかられた。なんということだろうか、家臣たちの自慢の種であった薩摩一華麗な殿様は、粗末なブリキの棺に覆われて、荷物のようにひっそりと宿屋から運び出された。

主君の去った京都で、都城精忠組は都城隊に加わり任務を遂行していた。

浪人たちの動きを封じ込めるため、久静の死を気取られてはならない。薩摩から交代要員が駆け付けるまでの期間、都城隊は藩の指示を仰ぎつつ、たった二百人で見知らぬ京都の町の治安を一身に背負わなければならなかった。

暗がりからいきなり刃を突きつけられる恐怖と内心闘いながら、彼らは辻々を見回った。むずかしい仕事をこなしながらも、彼らの表情は明るく冗談さえ言い合っていた。彼らの言動から主君が亡くなったと察する者はいない。

心配することは何もなかった。

公家社会が都城隊を見つめる目は、日を追うごとに変わってゆく。

心の壁に痛みをしまい込み、普段と変わらぬ振る舞いができる彼らを、単なる田舎者と蔑む者はいなくなった。特に岩倉具視は彼らを高く評価し、維新の際、自身の警護を都城隊に任せてい

る。都城の武士が幕末の京都や伏見、維新後の東京などで活躍するための土台、人的ネットワークはこの滞在中に築かれていた。

そうしてみれば、島津久静の客死はけっして無駄にならなかつたといえる。

さて、久光の上京から始まつた一連の出来事を境に、宮廷と薩摩藩は急接近した。

雅な宮廷社会とどこか血のにおいのする薩摩藩とは、一見すると水と油。だが、近世日本の中でしぶとく生き続けた二つの中世は、底流で通じあうものがあつた。両者は不思議なほど息のあつた手さばきで、明治日本への扉をひらいてゆく。短い期間とはいえ、都城島津家家臣団が主君の死を秘してまで果たした役割は小さくない。

都城精忠組は久光本隊とともに一足先に上京していたので、京都の地理に明るく裏道に至るまで頭の中にしつかりと入つていた。市内警邏の当番では、自然と仲間を先導する役回りになる。

京都の町に淀むどつしりとした空気は、想いを遺して亡くなった人々の無念、野心、祈り、怨念、秘められた恋のため息などが入り混じつて醸し出される独特のものだ。そのような時代の澱とも余韻ともつかないものが、都の魅力を生み出していた。

久静の想いもまた、この町を漂っているのだろうか。いやそれはあるまい。久静の想いはまっすぐ都城へ帰つたはずだ。この世で薩摩ほど素晴らしい場所はないし、その中でも都城ほど美しい場所は他にないのだから。

彼らが見上げる先には、澄んだ青い空が白い雲を浮かべ、久静の棺が辿り着いた緑輝く大地の

上へと続いていた。収穫の季節がそこまで来ている。農作業は進んでいるのだろうか。帝のおわす荘厳な御所の塀の前で、彼らはしきりと自分の田畑の様子を気にしていた。

第四章 薩英戦争

この会談が決裂すれば、薩摩藩とイギリスは再び戦火を交えることになる——。

文久三（一八六三）年十月五日昼下がり、横浜の外国人居留区にあったイギリス公使館はただならぬ緊張感に支配されていた。

外国人居留区といっても当時の横浜は道幅も狭く、外国人たちの住まいも簡素な木造平屋建てがほとんどであったが、イギリス公使館は二階建てで相当の広さがあった。

駐日イギリス外交部に勤務していたアーネスト・サトウの回想録『一外交官の見た明治維新』によれば、現在の「横浜人形の家」のあたりに建物があつたようだ。今では目の前に海が広がり付近には山下公園や港の見える丘公園などが点在する絶好のデートスポットだが、この頃はまだ漁村の風情を残していた。

三ヶ月ほど前に起こった薩英戦争の和平交渉は、この公使館を舞台にすでに二回行なわれていたが、双方が持論を繰り返すばかりで一向に着地点を見出せなかった。

イギリス側は三回目にあたるこの日の会合で合意できなければ話し合いを打ち切ると、事前に日本側に申し入れてきた。

これを聞いた会談の立会人である幕府外国方の役人や、薩摩藩の支藩である佐土原藩（現在の宮崎市周辺）の藩士たちは「すわ一大事」とばかりに慌てふためいたが、薩摩藩から送り込まれた交渉役の重野厚之丞（重野安繹）は落ち着き払った様子だった。

重野のちに実証主義を唱え、歴史学者として帝国大学教授となる人物で、残された写真によれば学者らしく几帳面きちょうめんそうな印象を受けるが、冷静沈着な風貌の下には剛胆さを持ち合わせていた。

重野の落ち着きぶりには、それなりの理由があった。

そもそも、交渉事においては、結論を急ぐ側のほうがが悪い。

イギリス外交部は幕府を脅しつけてさまざまな要求を通してきたが、一地方勢力にすぎない薩摩藩に対して同じ手法が通用しないので困惑していた。一方的に期限を切った高圧的態度は、イギリス側の焦りを示している。これは薩摩にとっては危機ではなく、むしろチャンスだ。

イギリス外交部のトップは代理公使ニールで、休暇で一時帰国中の公使・オールコックに代わり、一連の事態の発端となった生麦事件なまじまから薩英戦争までの陣頭指揮をとっていた。

若手外交官のアーネスト・サトウは、上司であったニールについて（身長は普通のイギリス人よりずっと低く、半白の口髭をはやし、額の辺に薄い一つかみの白髪がたれていた。気むずかし

く、疑り深い性質だった）（『一外交官の見た明治維新』坂田精一訳）と述べている。

張りつめた空気に満ちた公使館の応接室で、ニールの横顔に微かな戸惑いの色を読みとった重野は交渉の成功を確信し、おもむろに口を開く。

「本日は賠償金の件を友好的に話し合いたい。ついては賠償金と引き換えに、我がほうから貴殿らに申し入れたき条件が二つあります」

ニールらは息をつめて重野の次の言葉を待った。

「一つ目は貴国から軍艦を買い入れたいから周旋をお願いしたい。二つ目は、貴国軍艦内に収監されている我が藩の士官兩人を引き渡してほしい」

通訳に耳を傾けていたニールの瞳は次第に大きく見開いていった。重野の申し出のうち、後者の条件、士官の引き渡しの件はすんなりと解決できる。けれども軍艦購入の件はあまりにも思いがけなかった。交戦相手に対して、貴国の優れた武器を譲ってほしいという「講和条件」など、ヨーロッパ外交において百戦錬磨の経験を持つイギリス人でさえ、かつて経験したことがない。薩摩の真の狙いは何なのか、ニールの頭のなかは混乱した。

重野はさらに言葉をつなぐ。

「二つの条件さえ承諾してくだされば、わが薩摩と貴国との懇親は一層厚くなるというもの。私どもも喜んで賠償金をお支払いできます。以上のことは、我々が熟慮のうえで出した結論ですから、貴国側でもぜひご承引ください。もしも不承知ということであれば、談判はこれにて終わりたいと思います」

軍艦を譲ってくれば今すぐにでも講和を結びましょう、それが無理なら談判決裂、もうひと合戦してもよい、……なんという勝手な言い草だろうか。ニールらはぼかんと口を開けたまま、思わず顔を見合わせた。

薩摩武士は近世日本の異端児である。

近世の武士道は儒教や禪に基づく倫理観を土台としているが、薩摩武士はこのような形での武士道を行動原理としなかった。それゆえに彼らは明治維新という革命を成功させることができた、これが本書の考え方である。

このように述べると多くの方々から異論が寄せられるだろう。

国家の行く末のために自らの命を投げだした薩摩武士の行動は、しばしば武士の鑑かがみと評されてきた。その代表選手が西郷隆盛だ。現在でも書店の棚には西郷隆盛に関する本がずらりと並べられ、根強い人気を誇っている。

無教会主義を唱えた思想家で、文学者でもあった内村鑑三うちむら かんぞうはキリスト教社会から「異教徒」と呼ばれている日本人の中にも、道徳的、倫理的に優れた人物がいることを欧米人に示すために、英語で『代表的日本人』を著わし五人の日本人を紹介しているが、その五人の筆頭に挙げられているのが、西郷隆盛である。

内村は同書の中で、明治維新における西郷の業績を（ある意味で一八六八年の日本の維新革命は、西郷の革命であったと称してよいと思われまます）（岩波文庫、訳・鈴木範久）と高く評価して

いる。内村は西郷を「最後のサムライ」と呼び、西郷の行動の底流には陽明学と禪の素養があると指摘する。

武士道をキリスト教倫理に匹敵する、優れた行動規範だと考えるのは、内村だけではない。内村と同じく、キリスト教信者であった新渡戸稲造（にわたと べいざう）もまた、外国人向けに日本文化を紹介した著作『武士道』のなかで、武士道を支える柱として神道、仏教（ことに禪）、儒教（ことに陽明学）を挙げて説明している。

近世の武士道とは内村や新渡戸が著作で述べたように儒教や禪の思想に基づき、忠誠心や自己犠牲などを重んじる道徳観念であるというのが、私たちの持つていく一般的な見解であるし、実際、佐幕派、討幕派ともにほとんどの武士の行動原理はこれによっていた。

だが、そうした中であって「大いなる例外」と言うべき存在があつた。ほかでもない、島津家を主君として仰ぐ薩摩藩の人々である。

すでに述べたように、薩摩藩は江戸時代初期に大名家の入れ替えが行なわれた他藩と異なり、鎌倉時代より七百年もの間一つの家の支配が続く。このため表面的には幕藩体制を受け入れながらも、藩の構造の中に中世の色合いが濃く残り、そこで暮らす武士たちの精神構造もまた中世の武士の面影を留めていた。

薩摩武士はすでに失われた「中世武士道」を江戸末期まで守り続けた奇跡の集団である。

広く知られているとおり、中世の武士は領主から賜った土地のために命を懸けた。いわゆる「一所懸命」である。彼らにとつての命をかけて守るべきは何よりも目の前にある「領地」であ

って、それに比べれば、目には見えない大義や忠孝の精神など、二の次、三の次であった。

明治の文化人たちが褒めそやした、高い精神性を特徴とする近世の武士道は天下泰平の世に形成されたもの。戦争に明け暮れた戦国武士とはよって立つ世界が違う。形ある土地を拠り所とした薩摩武士は、理念よりも目の前にある現実を重んじるリアリストの集団。形のない精神性を拠り所とした近世の武士たちとは、武士としての矜りの在り方そのものが異なるのだ。

このような彼らの特性がいかなく發揮された好例が、冒頭で触れた薩英戦争の戦後交渉だ。

軍艦購入の斡旋を講和条件の一つとした薩摩側の申し出に、イギリス側はどう応じたのだろうか。（以下の記述はイギリス側史料としてアーネスト・サトウの日記抄である荻原延壽著『遠い崖』と回想録『一外交官の見た明治維新』、薩摩藩側史料として『薩藩海軍史』を参考にしている）。

我に返ったニールは慌て、言葉を選びながら「なぜ貴藩は軍艦がご入用なのか」と尋ねた。すると重野は堂々と、

「我が藩にはこれまで軍艦が一艘もなく、貴国が周旋を凶つてくだされば、我々も面目を施し、主君への申し訳が立つというもの」

「また、貴国のような軍艦は我が藩どころか、そもそも日本に一艘もない、ぜひとも斡旋をお願いしたい」

熱心に軍艦の性能をほめちぎる重野の瞳はきらきらと輝き、ニールらをさらに啞然とさせた。それというのは他でもない、英国の戦艦の砲撃によって薩摩の町が灰燼と化していたからである。

世界広しといえど、自分たちの故郷を焼き払った武器のその性能に惚れこんで、面と向かって敵方に武器をねだる者がどこにしようか。薩摩武士の構想力の飛躍はあまりにも大きすぎて、常人には計り知れない。

そもそも薩英戦争は前年の八月に武州生麦村で起きたイギリス人貿易商・リチャードソン殺傷事件、いわゆる生麦事件に端を発している。

事実上の国王・島津久光の行列に、たまたま出くわしたイギリス人男女四人の乗った馬が突っ込み、列を乱されたことに怒った藩士たちがリチャードソンを斬り殺し、他の二人にも重傷を負わせた。

これに対して駐日代理公使ニールは本国の指示のもと、賠償を請求してきた。

幕府に対しては公式の謝罪と賠償金十萬ポンド、薩摩藩に対してはイギリス海軍士官立会いのもとの犯人処刑と賠償金二萬五千ポンドという内容だった。十萬ポンドは約四十萬ドル、二萬五千ポンドは約十萬ドル（六萬三百二十三兩一步）、はいそうですかと右から左へ払えるような金額ではない。

幕府はのらりくらりと話をかわす戦術に出たが、ニールがイギリス極東艦隊の主力を横浜港に集結させるや否や、アヘン戦争の悪夢が脳裏に浮かびたちまち態度を軟化させた。

しかし一方の薩摩藩は「非はイギリス側にある」として断固、支払いを拒否した。

といっても、薩摩が賠償を拒んだのは、けっして排外主義や国粹主義ゆえではない。

彼らの言い分は「リチャードソンらを殺傷したのは彼らが外国人であったからではない。彼らが日本の国法を守らなかつたがゆえに斬つたのだ」というものであつた。武士の往来を妨害すれば、斬り殺されても仕方がないというのはたしかにそのとおりである。

もちろん、こうした薩摩の「正論」に対して、分別がないと批判することは可能だ。行列を乱したのが町人であるならばともかく、相手は異人ではないか。国内法よりも外交関係のほうを優先するのが当然だろう、とは当時の幕府も考えた。

しかし、薩摩の感覚は違う。

「我らがイギリスに行けば、イギリスの法を守らなくてはいけないのと同様、イギリス人もこの日の本ひのもとにあつては日の本の法を守るのが当然。それだけのこと」というのが薩摩の感覚である。攘夷でもないし、卑屈になることもない。法は法——薩摩人の考えはどこまでも地に足がついている。

だが、この時のイギリスは、薩摩がそうした「道理」から賠償金を拒否しているとはつゆほども想像していなかつた。万事において口先だけは勇敢でも、実は腰抜けの幕府と同様、「圧力をかければ、サツマも折れる」とイギリス人たちは踏む。

事実、徳川幕府はペリーの来航以来、欧米勢の要求に屈し続けてきたといつても過言ではない。攘夷派の公家や諸藩から煽あおられると、その時は強気になつたりもするが、最後には欧米の要求に従うか、従わないまでも問題を先送りにし続けてきた。

だからイギリス代理公使ニールは、薩摩を見くびった。

文久三年六月二十七日、七隻の英国艦隊を率いて鹿児島湾に侵入した時も、ニールは戦争などするつもりはさらさらなかった。どんなに勇猛なことを言っている、蒸気船を見れば薩摩の武士たちは仰天して、平伏するだろうと高をくくっていたのである。

ところが案に相違して、艦隊が現われても薩摩側は態度を変えない。そこで、イギリスは薩摩藩所有の三隻の蒸気船を拿捕する作戦に出た。

聞くところによれば、三隻の蒸気船を入手するために薩摩藩が払った額は三十万八千ドルであるという。かたやイギリスの求めている賠償金は約十萬ドル（二万五千ポンド）。いくら彼らが愚か者であろうと「虎の子」の汽船を差し押さえられては、賠償金を払わざるをえないだろうとイギリス側が考えたのも当然だ。

ところが、である。

七月二日正午、薩摩藩は蒸気船の拿捕を宣戦布告と捉えて戦端を開く。

そこでイギリス側も、拿捕した蒸気船を爆破したうえで艦砲射撃を始めた。艦隊の大砲は火を噴き、折からの強風にあおられ鹿児島城下はあつという間に炎に包まれた。

しかし、それでも薩摩は降伏しないので、イギリスは困った。

こういう事態に発展するとは夢にも思っていなかったので、イギリス艦隊は長期にわたって戦争を継続できるだけの燃料や食糧の備えをしていなかったのである。

そこで、イギリス艦隊は七月四日に碇を揚げて横浜へ帰ることになったのだが、どう見ても、この一戦はイギリス側の圧勝だった。ニールらが和平交渉の行方について樂觀視していたのは、無理もない。

だが、その予測もまた見事に覆される。薩摩藩は自らの正当性を主張し、なかなか折れようとならない。それどころか、こともあろうに「イギリスの軍艦を買いいたい」と言い出す始末だ。

予測不可能な薩摩側の対応に、イギリス側はさぞかし業を煮やしたかと思いきや、案外そうでもない。むしろ、奇妙なことにイギリス人たちの顔色は次第に明るくなってゆく。そもそも、自国の軍艦をここまで誉められれば悪い気はしない。心なしか身を乗り出し機嫌も良くなってきた。英国「軍艦をご入用とのことだが、いったい誰と戦争をするのですか」

薩摩「今、これといって敵はないが、軍艦は有事のために備えておきたい。また一艘だけでなく、追々数艘注文したいのだがいかに」

ニールはやや考え込み、やがてひたと正面を見据えた。

英国「軍艦の売買は、兵士を売買するのと同じこと。請け合いかねます」
決定的な一言に薩摩側は思わず沈黙した。

これを見たニールは眉を開き、重野の困った顔を楽しむように目を細め、さりながら……と続けた。

英国「我が政府に不用の軍艦があれば、許しを得たうえでお売りできるかもしれません」
緊迫した会場の空気は一転、妙になごやかな雰囲気に変わる。

いつしか両者は立会人の幕府の役人をそつちのので、軍艦購入に関する具体的な項目を熱心に話し合い出した。

軍艦の大きさ、値段、建設に要する日数、果てはイギリスより船の運航や武器の扱いに慣れた者を薩摩へ派遣しノウハウを伝授するところまで、トントン拍子に話は進む。

もはやこれは和平交渉ではなく、商談と呼ぶべき内容であった。

だが、薩摩の人々の「交渉上手」は、これで終わらない。

「貴国の軍艦を買いたい」という申し出はたしかにイギリスにとつては嬉しい話ではあったが、しかし、ここは外交交渉の場である。イギリスとて筋を通さないわけにはいかぬ。

そこでイギリスはふたたび、肝心の賠償金の話を持ち出した。すると薩摩側はあつけらかなと「今は手許てもとに金がない、幕府から借りるから数日待つてほしい」と言い放つではないか。

屈託のない薩摩側の態度を見ると、いかにも幕府との間で根回しが済んでいるのだろうと考え、てしまいが、実際は違ふ。

薩摩藩は幕府へ借金を申し入れていたが、返事を保留されていた。幕府の立場になれば、勝手に外国と戦争をして、今度は賠償金が払えないから金を貸せとは随分無茶な話、返事を洩るのもうなづける。

要するに、あと数日あれば幕府から金を引き出せるという、薩摩の言葉には確証はない。にもかかわらず、幕府の役人の面前でこのような約束をしてしまうのは、幕府首脳へプレッシャーを

与えるためでもあった。これにより幕府は、賠償金の問題から無関係ではいられない。なんという厚顔さであろうか。幕府の役人の辟易へきえきとした表情が目には浮かぶ。

ニールは部下のサトウにさえ〈氣むずかしく、疑り深い性質〉と評された男だ。幕府と薩摩の間の深い溝に氣づかないはずはない。

ところが、あろうことかニールは薩摩案を快諾する。彼は、事なかれ主義の幕府はイギリスとの関係悪化を極度に恐れている、薩摩に大金を出してでも和平を贖あがなうはずだ、と踏んだのだ。

これで交渉はめでたく終わった。だがよく考えてみると、イギリス側が薩摩藩に突き付けた要求のうち賠償金は確かに一応の決着をみたが、もう一つの件——イギリス人貿易商・リチャードソンを殺害した犯人をイギリス海軍士官立会いのもと処刑する——、生麦事件の本質とも言うべき肝心要の件は未解決のままだ。

もちろん、イギリス外交部はこの件に関しても追及したが、薩摩側は申し訳なさそうな表情を浮かべ、下手人を搜索したがどうしても見つからない、と言ったきり取り付く島がなかった。ニールらはこの言いわけを頭から信用していかなかったが、これ以上この件で争ってもイギリス側が得るものは少ないと判断し、生麦事件の犯人の件を不問に付した。

かくして薩摩とイギリスとの間には、いつしか和氣藹々あひまとした雰囲氣ふんいが生まれた。

この時、イギリス側は知らないうちに、すっかり薩摩藩の術中にはまってしまったといつてもよいだろう。

イギリス外交は薩摩藩の意表を突く申し出に翻弄されているうちに、自覚のないまま、自然と敵国である薩摩藩への信頼を深めてゆく。

今回の戦争で鹿児島は焼かれ、三十万八千ドルで購入した虎の子の蒸気船も煙と消えた。経済的な視点でのみ比べると、イギリスへの賠償金の支払いを拒んで薩英戦争に至った薩摩藩の損害は幕府よりも遥かに大きい。その点においては幕府の選択のほうが合理的ではあった。

しかしイギリス外交は、さっさと賠償金を払った幕府よりも、自分たちを散々手こずらせたあげくに、軍艦買入れまでを申し出た薩摩藩のほうを確かな交渉相手として認める。

合理と非合理が一人の人物の中にすんなりと同居している矛盾——旗本や他藩の武士たちを懼れさせた「負のカード」がひらりと裏返り、「正のカード」としてイギリス外交を惹きつけた。これを境に薩摩藩とイギリス外交は急接近し、時代は一気に動き出す。

ところで、十萬ドルの賠償金を幕府から借りるほど、手元不如意だったはずの薩摩藩が、どうしてイギリスから最新鋭の軍艦を何隻も購入する約束をできたのか、疑問を抱く方もあるかもしれない。

だが、ご心配には及ばない。薩摩藩の財布は、他の人が払ってくれる場合には空っぽなのだが、ほしい物があればどこからともなくカネが出てくるという、まことに都合のいい、不思議な仕掛けになっていた。

実際、薩英戦争ののち、薩摩藩ではイギリスの支援のもと、大胆な軍事改革が行なわれ、兵備の西洋化が大きく進む。薩摩は三百諸藩の中でも、最新鋭の武器を有する軍隊を保持することに

なつた。

もちろん我らが都城の人々が、こうした新しい動きに対して積極果敢に動かないわけはない。

薩英戦争終結の翌々年に当たる慶応二（一八六六）年三月、都城島津家は重信弥一郎ら数人を長崎に派遣し、英式兵法を学ばせるとともに洋式銃を数百挺購入した。

また、薩摩藩では慶応三（一八六七）年、長崎において一括購入したミニエー銃一万挺を藩士の持ち高に応じて強制的に割り当てている。当時の日本においては最新鋭の銃であるのだから、もちろん高価で、藩士たちにとっては相当な負担であったと推測されるが、藩からの割り当てとは別に、都城ではさらにミニエー銃を買い足している。

〈小銃も長崎辺で最初はずかに二三百挺といふくらいの注文をして居りましたけれども、これも二大隊以上、三四千挺くらいの備えもできました〉（『史談会速記録』第二百八十輯）

藩全体で一万挺にもかかわらず、一私領の都城で三、四千挺所有しているというのはいかにも多い。しかし負けず嫌いで、新しいものの好きな彼らにとってはけつして多すぎる数ではない。彼らの美学では、武士たる者は一流の身なりで戦場に向かうべきなのである。新品のミニエー銃を手に入れた彼らは、都城領内の数ヶ所に設けられた訓練場や射撃場などで、実戦さながらの軍事演習に余念がなかった。事が起これば、藩内で一番勇猛果敢な者どもが誰なのか、はつきりさせてやるのだと彼らはしきりと息巻く。

そしてその望みのとおり、彼らがふたたび京師の地を踏む時が近づいてきていた。

島津家の戦争 米窪明美著

発行・集英社インターナショナル 発売・集英社
定価 1,700 円（本体）＋税
ISBN 978-4-7976-7208-4

ウェブでのご予約は [こちらにどうぞ!](#)